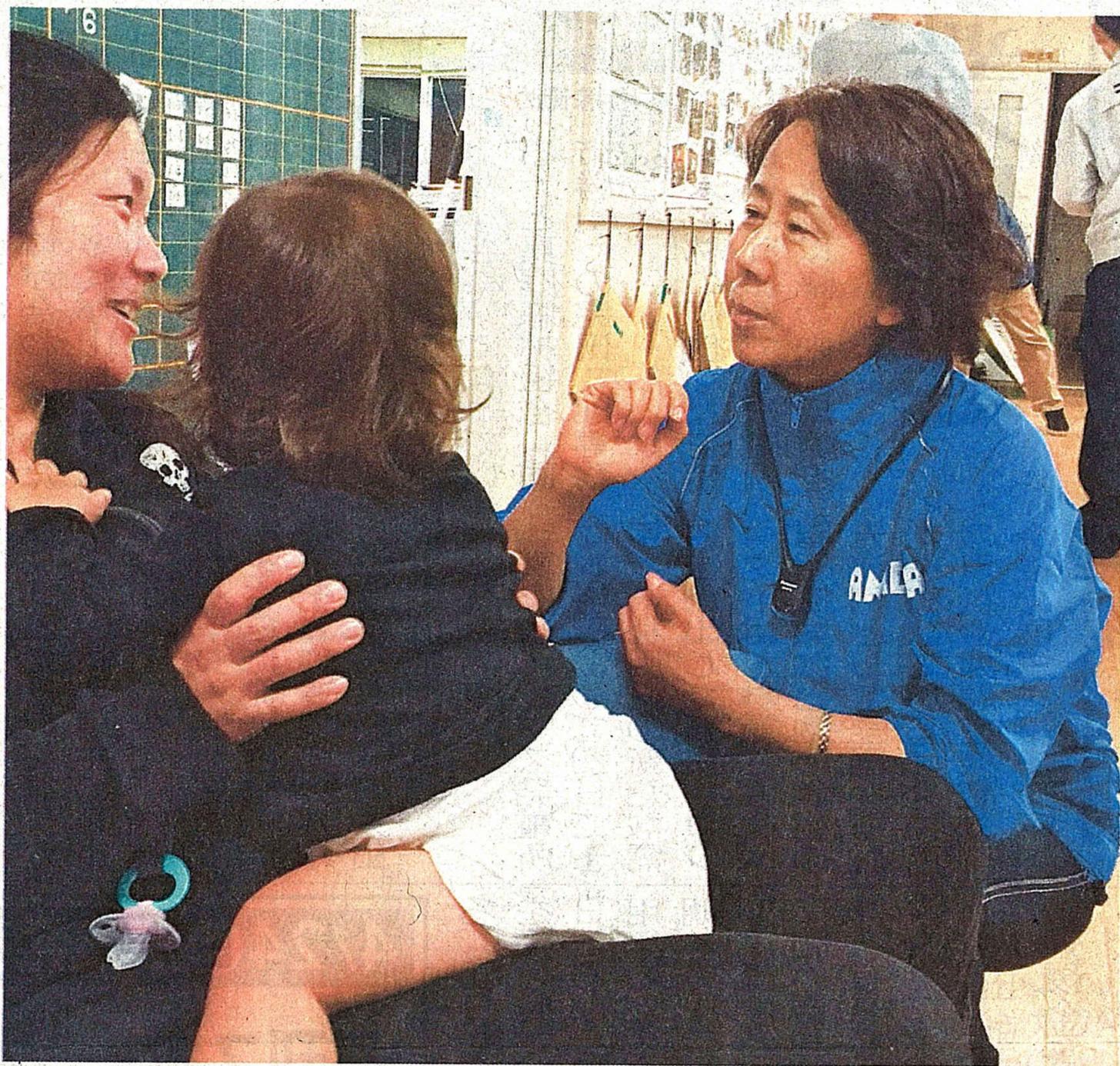


故郷を支えたい



避難所の小学校で診察を待つ親子に話しかける難波さん＝19日、熊本県益城町

熊本地震で甚大な被害が出た熊本県益城町で緊急支援活動が続ける国際医療ボランティアAMDA（本部・岡山市）のメンバーの中に、実家が被災した同町出身の女性がいます。理事の難波妙さん（52）＝総社市宿。悲しみをこらえながら被災地となった故郷を支えようと汗を流している。

難波さんはAMDAの先遣隊として、熊本地震発生翌日の15日朝に現地で16日未明の「本震」に遭遇した。ご

入り。実家で1人で暮らす母親の無事は確認できたものの、がれきだらけの町並みや屋根瓦が落ち家具が散乱した実家を目の当たりにし、「古里がなくなつた」と感じたという。

惨状に胸を痛める間もなく、AMDAと総社市が合同で編成した救援本隊の受け入れ準備に奔走。15日夜に到着した本隊と合流後、熊本市内のホテル

AMD A難波理事 悲しみこらえ活動 益城町の実家被災

う音とともに鉄筋の建物にひびが入り、自室の浴槽が割れた。死の恐怖に襲われながらホテルのロビーで夜を明かした。

AMDAが拠点とする町立広安小学校の避難所は本震後、身を寄せる住民が約800人にまで増加。17日夕に電気が復旧したものの、水道とガスは不通のまま。保健室に設けた救護室には今も1日60人前後の傷病者が詰め掛けている。

難波さんは母を福岡県の妹に託した後も、学校の床で寝泊まりして支援を継続。AMDAと外部との調整役として本部から届いた救援物資を他の避難所に運んだり、不足する医薬品を地元薬剤師会と融通し合う態勢を築いたりと多忙な時間を過ごす。

偶然にも広安小は難波さんの母校で、支援活動の受け入れ先を相談した町職員は中学の同級生。AMDAで10年以上活動する難波さんも「故郷が被災するとは」と戸惑うが、「土地勘があるだけにスムーズな支援ができてい

る」と話す。

18日夜には、同小出身という30代の男性被災者が難波さんに握手を求め、初対面ながら共に涙を流して校歌を歌った。「みんな先行きが不安でたまらない」。難波さんは継続的な支援の必要性を痛感している。（大橋洋平）